

地球変動研究の最前線を訪ねる
—人間と大気・生物・水・土壌の環境—

小川利紘・及川武久・陽捷行 編

清水弘文堂書房 2010年2月発行

A5版 439頁 ISBN 978-4-87950-595-8 C0040 定価本体 3,000円 + 税

本書はすでに、自然科学の研究最前線から退いた3名の環境研究者が執筆ならびに編集した環境研究の解説書である。環境研究は多分野からなる大変裾野の広い研究領域であり、かつ個別の研究が地球温暖化と明瞭な因果関係が明らかでない多くの専門分野を含んでいる。そこで多くの分野を網羅して環境問題を理解してもらおうというのが編者のねらいだろう。

本書は3部構成になっている。第1部では、地球環境問題に関するIGBPやIPCCなどの国際的な取り組みを紹介しており、環境研究の大まかな歴史を理解するにはよい。第2部は地球システムにおける物質循環を扱っている。ともすると、我々は「過去半世紀の気温の上昇のほとんどが人為的温室効果ガスの増加による可能性がかなり高い」ということのみを、特にマスコミはそうであるが、取り上げる傾向にある。すなわち、我々は、科学には分からないこと、不確かなことも多いということを忘れ、ついでに考えることすら放棄する悪い癖がある。第2部では、人間圏の成り立ち、地球規模の炭素循環（大気、陸域生物圏、土壌圏、海洋、森林）、地球規模の窒素循環（大気、陸域生物圏、土壌圏、海洋）、水循環と水資源

を分かっていることと分からないことを分かりやすく解説している章が多く、環境問題の入門書として概要を知るには格好の教科書である。そして、第3部では地球変動を追うというタイトルのもとに、13の研究トピックを扱っている。多くの読者にとっては、これらのトピックの一端はテレビや新聞等で見聞きしているだろう。比較的若い著者が多いようで、書きっぷりから研究に携わったことについての喜びが感じられる。

環境研究の多くはプロジェクト研究方式で行われてきた。外国との共同（競争）研究で多額の研究費がついた分野もあり、一つの大きな組織になっている。したがって、自分の専門を武器に、これから環境問題を取り組んで生きたいと思うならば、現在の小さな殻の中に閉じこもってはいは展望がないということを最後に付け加えておきたい。

長谷川周一（北海道大学大学院農学研究院）

2010年5月17日受稿 2010年5月18日受理
土壌の物理性 115号, 63-63 (2010)